# 『坊っちゃん』

作：夏目漱石

親譲りの無鉄砲で、小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分、学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、「いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。」と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして「二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるか」と云ったから、「この次は抜かさずに飛んで見せます」と答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰って奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が「光る事は光るが切れそうもない」と云った。「切れぬ事があるか、何でも切ってみせる」と受け合った。「そんなら君の指を切ってみろ」と注文したから、「何だ指ぐらいこの通りだ」と右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸（さいわい）ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕（きずあと）は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩（にじっぽ）に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があって、真ん中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸（せど）を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣（よつめがき）を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方、折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕（つら）まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ宛てて、ぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷（あわせ）の袖の中にはいった。邪魔になって手が使えぬから、無暗（むやみ）に手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡（なび）いた。しまいに苦しがって袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足搦（あしがら）をかけて向うへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様（まっさかさま）に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。

その晩、母が山城屋に詫びに行ったついでに袷の片袖も取り返して来た。